



みずみどり

2006年5月15日 第54号

発行：いたばし水と緑の会 事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会  
<http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/>

E-mail : [mizumidori@nifty.com](mailto:mizumidori@nifty.com)

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124



これが  
板橋区最後の  
の  
自然破壊に  
してほしい

雑木林、畑、屋敷林など身近な自然が次々となくなっています。公園だってなくなるのです。今年の1月、成増5丁目のタイヤ公園の真ん中に看護学校が出現して、公園が借地だったことを思い知らされました。どうやら今は高度経済成長時代以来、何回目かの開発ブームのようです。

私たちが大事にしていた成増1 - 35・36の雑木林が開発されると情報が入り、区長宛の雑木林保全の要望書を持って行きましたが、対応して下さった助役の口からは「保全」



長い年月を経てつくられた森がなくなる瞬間(いずれも成増4 - 33)

# 新しい年度に向けて

いたばし水と緑の会会長 鈴木 信子

今年はいつまでも寒さが残っていますね。散歩コースの白子川にもまだ大雨の後のにごり水に花筏が見られます。時折コサギの姿にも出会います。この水辺に子供達の楽しい歓声が聞かれたらと夢のような事を考えながら今日も散歩をします。

ここ三年程、健康を害してペットボトルの水と薬をたえず身近に置く生活で、会員の皆様にご面倒をおかけし申し訳なく思っていますが、私にとって「自然は神なり」ですから、水と緑の恵みによって必ず健康を回復して見せると思っています。

この処、世の中の流れがあわただしく、人の心ものどかさを失い、日々緑は少なくなっています。これはどこからくるのか、一度立ち止まって考える事が大切と思うのですが。

先日、NHKで、23区の屋敷林の狸を特集していましたが、板橋にもいますよ。我が三園にも遊びに来ています。心なごむ話ですね。

戦後の荒廃した風土の中から立ち上がり、何もなくても希望を持って生きてきた私たち世代から子や孫の未来を考える時、一抹の不安は拭えませんが、夢を持って前途を切り開いて進んで欲しいとひたすら祈らずにはられません。

今日はアースデーです。(4月23日)

という言葉も「公有地化」という言葉も聞かれませんでした。

私たち有志は、「このまま自然がなくなるにまかせてはいけない」という思いで、「身近な自然ネット」という窓口をつくり、広く市民に呼び掛けて、板橋区内の自然の現状を私達の間で検証することになりました。

この自然の検証では、板橋区みどりと公園課が、1987年(昭和62年)から5年ごとに継続調査を行ってきた特定樹林地(1987年に面積300m<sup>2</sup>以上あった樹林地(民有地))の現状を見ることにしました。17年3月に出された最新の「緑地・樹林地の実態調査報告書」に特定樹林地の状況がでています。これによると、これまでに特定樹林地66地点のうち16地点が消失しています。

1月末から3回にわたって、成増、南常盤台、東新町の特定樹林地を見ただけですが、さらに4地点の開発を目のあたりにし、板橋区にある民間樹林地のあやうさがひしひしと迫ってきます。

**伐採の傷跡が生々しい(樹林番号9, 成増4-33)**(写真は表紙と次ページ上)

地元説明会をそそくさと済ませ、樹齢300年以上もある「板橋区保存樹木」のラベルのついた大木が伐採され、無惨な姿を見せて転がっていました。

**公園の樹林地も消失した(樹林番号11, 成増5-6タイヤ公園)**(写真は次ページ中)

タイヤ公園には旧白子川沿いの斜面林があり、アオオサムシやセンチコガネなど雑木林に

住む昆虫がいたところです。3人の地主さんから借りて公園として区民に解放されていましたが、用地の中央の地主さんが亡くなられ、相続のため手放されて看護学校が建設。生き物にとって、自然地は大きいほど、また、まとまっているほど、よい環境です。言い換えれば樹林地の1/3の消失や分断は自然にとってそれだけですまない大きなダメージです。



成増4 - 33 左: 2006年2月、右2006年5月伐採後。この森に続く森が遠くに見える



成増5 - 6 タイヤ公園 左は伐採前、右は公園の真ん中に建物がたったところ

#### 伐採された雑木林（樹林番号5、成増4 - 22）

白子川の支流、コイド川の斜面の雑木林。平成16年度調査では雑木林の残存記録があります。18年1月にはほとんど伐採されていました。近所の人話では隣に出来た建売住宅の住民の苦情により伐採されたとのこと。新住民からの落ち葉や日陰の苦情があったのでしょうか。



### かつての緑のトンネルは・・・(樹林番号3、成増3-22)

約20年前、有楽町線が開通直前のマンション広告を保存されている方がいました。それによると「通勤は緑のトンネルを通過して」がキャッチフレーズで、雑木林のトンネルの写真(左下)がでていました。当時雑木林があったまぎれもない証拠です。写真右下は1997年



(約10年前)片側の雑木林はなくなったものの、谷側の林は残っています。この林も数年前伐採され、斜面によう壁ができ、土をいれて宅地造成されて、今は住宅の建設中。こうして、昔からずっと続いて存在し、この土地にしかない貴重な自然の森がなくなり、どこにでもあるありふれた風景に変貌していくのです。



### まちづくりに 板橋の森を生かせないのか

#### なくなりそうな雑木林(樹林番号1、成増1-35, 36)

川越街道の都県境の手前左側にあるクヌギ、コナラが中心のこんもりした森。2年間にわたる区民による自然調査では、「東京都の保護上重要な野生生物種」で区部のDランク(絶滅)、Bランク(危急)、Cランク(希少)種の昆虫、昔は雑木林に普通に見られた野草、なかでも今の板橋区ではこの場所にしか見られない野草もあります。樹林地と駐車場を含む開発計画があり、駐車場は既に閉鎖、5月から遺蹟調査が始まっています。17年12月に区長に提出した雑木林保全の要望書にも返事はなく、このまま切り捨てられるのを待つしかないのか・・・



**近隣住民が自然林保全活動に乗り出している（樹林地番号7, 8、成増4 - 24）**

やはり大規模な開発が計画されており、土地は既に不動産業者の手に渡っています。ここでは、板橋区議会宛、自然林の保全を求める下記の陳情の署名運動を行っています。問い合わせは池上孝則さん（090 - 1200 - 2455）、または当会事務局へ。

（陳情内容）

1 板橋区の特定樹林地である成増4丁目24番の自然林（樹林地番号7, 8）を、板橋区として保全してください。

2 相続時に自然林等の緑地が失われないよう、環境保全を恒久的に実現する法律の制定を国に対して要望してください。

（理由）板橋区の残された自然林等は、祖先から受け継いだ大切な宝であり、私たちはこれを次世代に引き渡さなければならない責任があります。

みなさまのご協力をお願いいたします。署名用紙はご連絡いただければ郵送します。また、いたばし水と緑の会ホームページから印刷できます。（坂本 郁子）



**成増4 - 24自然林と自然林にあるケヤキの保存樹木**

---

**いたばし水と緑の会総会を開きました**

4月22日（土）14:00～エコポリスセンターで総会を開きました。もっぱら失われていく板橋区の雑木林、湧水保全条例の話題になりました。赤塚公園の自然地の維持とともに、課題の多い一年になりそうです。

**情報 トンボ池他**

乗蓮寺裏の池ではオタマジャクシが元気に泳いでいました。ザリガニは見当たりませんでした。池の中のショウブにトンボの羽化したヤゴ（ヤンマ？）が一つありました。

美術館前の自然池ではザリガニがかなり居るのが見えますね。オタマは居ません。トノサマガエルが1匹コンクリートの杭の上に乗っていましたよ。メダカが減ったように思いました。

大門公園脇の民家にあったヤドリギがなくなっていました。ケヤキの木が根こそぎにされた跡がありました。あーア残念！（猪鼻昭二）

## ユキツバキの話

私がユキツバキを初めて見たのはちょうど40年前の5月の連休、山形県新庄市に近い鮭川村だった。中学以来のムシ仲間のSと、ギフチョウ・ヒメギフチョウの混生地として一部で知られていた同地を訪ねた時であった。まだ雪が消え残る雑木林に咲くツバキ、林の縁にはカタクリ、キクザキイチゲ、ショウジョウバカマが群れ咲き、その上をギフチョウが飛び過ぎる。雪深い北国の早春風景の印象は圧倒的であり、その後、足繁く日本海側多雪地を5月の連休頃訪ねることになっていった。

### ユキツバキとは

日本海側でも沿岸部にあるツバキはヤブツバキだが、積雪量が多い山よりの地域に生えているツバキがユキツバキである。両者を変種とするか、より一層分化が進んだ亜種とするかは、分類学者により異なっている。葉の組織構造や雄しべの形態の差は大きいようなので、分化はかなり進んでいるのではなかろうか。

ヤブツバキとユキツバキの判りやすい違いは、樹形の差である。ヤブツバキは幹が真っ直ぐに立ち、かなり大きな木になるが、ユキツバキは地際から細い幹が何本も出て、枝との区別がはっきりせず、樹高は低い。落葉広葉樹林の林床に点々と這うように生える低木がユキツバキで、ヤブツバキは照葉樹林内に直立している。

ユキツバキの材は粘りがあり、たわみ易い。大部昔の話だが、私は長崎県対馬の山中でヤブツバキの藪を漕いだことがある。伐採跡地に密集したヤブツバキは身体を押し込めない程固くたわまない。佐須奈から比田勝に山越えで抜けようとしたのだが、8月の日差しも加わり、気力も削がれ撤退してしまった。私の長い藪漕ぎ経験で、唯一敗退した藪である。これに比べればハイマツやネマガリザサの藪など楽なものである。ヤブツバキの固さと、踏みつけければ地に這いつくばってしまうユキツバキの柔らかさを身をもって知る筆者は、両者の分化の差もかなり大きいような気がするのだが。

ユキツバキの分布地は秋田県中部から、滋賀県の北部までで、大場秀章(2003)によれば1月の降水量が200mmを越え、かつ最深積雪が150cm以上の地域に限られるそうだ。標高は800mぐらいまで分布し、一部地域では中央脊梁山地を越え太平洋側山地まで進出しているが、中部地方以北では、太平洋沿岸のヤブツバキ産地と日本海側のユキツバキ産地の間は両方とも無い真空地帯が広がっている。

### 多雪地帯に適応した植物

幹、枝がたわみ易く、斜生する性質が多雪地帯に適応していることは判り易い。重い雪に耐え、折れることなく、春になり雪が解けるにつれ撥ね上がる。雪の下は案外暖かく常緑の植物も冬の乾燥と寒さに耐えられる。常緑植物の北限は日本海側の方が太平洋側よりも北に位置することが多い。ヤブツバキもこの一例である。日本海側多雪地に固有な草本植物にはコシノカンアオイ、トキワイカリソウ等常緑のものがある。エゾユズリハ、ヒメアオキ、ハイヌガヤ等の常緑低木は太平洋側のものに比べると、日本海側のものは材にねばりがあり、斜生する樹形になり、変種として区別される。高木ではスギ、ブナ、ミズナラ等も日本海側のものは材にねばりがあり、変種とされることもある。

ブナ、マルバマンサク、ヒロハカツラなどの落葉樹では葉が大きく柔らかくなる傾向が日本海側でみられる。これは春先の豊富な雪解け水に適応した形態とされている。

動物ではライチョウ、オコジョ、トウホクノウサギ等の白い冬毛は多雪地帯への適応だが、植物に比べると少ないようで、昆虫類にははっきりしたものは無いようである。他の動物群については筆者は知識が無い。

### 近縁ではないのに何故似ているのか

材にねばりがあり、地に這い易い性質は分類上の多様な植物群に独立して発生している。多様な分類群に平行して、独立して共通な性質が生み出されるということは、現在、あるいは非常に近い過去に共通の環境にさらされていたということである。多雪という共通した淘汰圧に様々な植物がさらされていたということである。植物ではこれが割合判り易いが、程度の差こそあれ移動という手段を持つ動物では意外に判りづらい。

マレー半島中部には互いに非常によく似ているが、分類群の異なる大型タマムシが8種類も生息するそうである。8種とも肩が張り出し、背は金緑色、腹は赤色に輝くタマムシだという。多分熱帯雨林の林冠部を昼間ブンブン飛び回っているのであろう。日光と緑の森林に擬態しているのだ。用語上はカムフラージュ、隠蔽という方が正しいのであろうが。上空の鳥の目を緑の輝きでごまかし、下からの目は赤い色でごまかせる・・・ような気もする。肩の張り出しは飛翔筋発達の現われである。

インドネシアのスラウェシ島はチョウが巨大化する島として知られている。巨大になるのはアゲハチョウ類などもともと大型のチョウだけのようで、近隣地域の同種や近縁種に比べると大きく、かつ前翅の前縁部が突出する傾向がある。アホウドリなどの海鳥類に似たグライダー型の翅になるのである。滑空性能を高め、飛翔能力を向上するような環境にさらされているのであろう。長く腕のように伸びた半島の集合という同島の地理的環境のせいであろうか。白い冬毛はまだしも、以上の2例は反論がいくらでもでそうである。

### 多雪への適応形態はいつ成立したのか

多雪地域に適応した性質は、多雪という環境が成立した後に生まれた、これは一部の進化論者を除いて、たいていの人々が同意してくれるであろう。日本海側が多雪になった時代はいつなのであるか。坂口豊(1984)によれば、日本で湿原の発達が始まるのは約13,000年前と8,000年前で、前者は寡雪期から多雪期へ、後者は多雪期から豪雪期への転換期であるという。13,000年前はウルム氷期の寒さは過ぎ去ったが、まだ現在よりはかなり寒い時代である。8,000年前は縄文海進が本格化し始めた時代で、今より少し温かい時期である。日本海に太平洋の暖かい海水が入り、冬の季節風がたっぷり水蒸気を吸い上げ、脊梁山脈にたっぷり雪を降らせる現在のような気候が成立した時期である。

北海道の渡島半島の植物相は本州の日本海側のものとよく似ている。ブナ、マルバマンサク、エゾユズリハ、ヒメアオキ等は北海道では渡島半島のみに見られる植物である。現在より6~8程気温が低かった、ウルム氷期の渡島半島は亜寒帯の針葉樹林帯となり、温帯性の落葉樹は生育できず、ブナ等は15,000年前の氷期終わり以後まだ水没していなかった、津軽海峡の陸橋を通り北海道に進入した。タルマイソウ、エゾイソツツジ、エゾツツジ、チシマツガザクラ等の北海道と本州東北地方にだけ共通する高山植物は20,000年前頃にこの陸橋を通り本州に侵入した。当時の推定気温からみればこうならなければならないのだ。

青函トンネル工事ため、津軽海峡の海底地形が詳細に調査されたが、北海道と本州を結ぶ陸橋の形跡は無いということであった。海峡の最も浅い所は水深140m、これは朝鮮半島と対馬の間の海峡とほぼ同じである。大方の地質学者の見解はウルム最盛期の海面低下量は80~100m前後であり、リスウルム間氷期約130,000年前以降北海道を除く本土は大陸とは陸続きにはなっていないというものである。日本海と太平洋の接続が氷期にも維持されていたのなら、日本海側のやや雪が多い環境も同じく続いていたのではなかろうか。北海道東部は化石氷楔が少数だが発見されているので、永久凍土が部分的に存在し、厳しい寒さと乾燥にさらされていたであろうが、渡島半島はブナが少数であろうが、生き残れる程度の積雪はあったのであろう。20,000年前頃の最寒冷期の津軽海峡は細い水道となり温かい海水はほとんど入ってこなかったが、エゾユズリハ、ヒメアオキも何とか絶滅を逃れたのであろう。ブナを食べるフジミドリシジミ、マルバマンサクを食べるウラクロシジミが渡島半島に生息することも傍証になる。後氷期の森林回復が早いことの一因は、その地で生き続けた少数の個体があったからでこそあろう。前田保夫(1980)は常緑カシ類が房総半島南部で氷期に生き残っていないければ、その回復はずっと遅かったであろうと述べている。

ヤブツバキとユキツバキの種分化もたった15,000年程で出来たとは思われない。100,000年以上の歴史は経ているのではなかろうか。ユキツバキの種内変異は大きい、ヤブツバキは小さいらしい。日本海側のブナの遺伝的組成は均一だが、太平洋側では複雑だそう。渡島半島のものはどうなのであろうか。種が違えば多雪地への適応の歴史はまた異なるはずである。コシノカンアオイ、トキワイカリソウの常緑は多分多雪への適応ではなく、その歴史はもっと古いはずである。ウラスギとも呼ばれる日本海側のスギの歴史は新しいような気が

するが根拠は全くない。

本州以南の生物相はリスウルム間氷期以降、大陸から孤立していたとする方が説明はつけ易い。ライチョウ、アズミトガリネズミ、タカネヒカゲ、ハハコヨモギ等の日本アルプスのみに棲息する高山性生物もそうである。氷期には繋がっていたことが確実な本州、四国、九州の生物相と北海道の生物相の違いは成立の歴史を観なければ説明はつかない。ブラキストン線はやはり大きかったのである。(追加：北海道十勝で約300,000年のブナ化石が多数出土している。本州で発見されるヒグマ化石は泳いで渡ったのか。利尻で近年のヒグマ記録があったはず。旧石器人は舟を使ったのであろう。港川人も泳いで渡ったはずはない。セダカオサムシやエゾツツジの本州渡来はいつか。) 釣巻岳人

## 活動のお知らせ

**運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。**

6月運営委員会： 6月2日(金) 18:30～20:30

7月運営委員会： 7月7日(金) 18:30～20:30

**いずれもエコポリスセンター環境学習室です。**

**会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく(次回は19日になります)**

日時：7月19日(水) 18:00～ 場所：エコポリスセンター

**変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。**

**活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)**

毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に自然観察やゴミ拾い、課題があった場所について別途必要な修理等を行っています。原則として雨天も実施します。

### 5月の活動 城址観察会

緑が濃くなってきました。バッタ広場も虫たちでにぎわっているでしょう。ゆっくり城址周辺を歩いて自然を探します。

日時：5月27日(土) 10:00～12:00

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

### 6月の活動 城址観察会と清掃

日時：6月24日(土) 10:00～12:00

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

### 身近な自然ネット 雑木林見学会

日時：5月28日(日) 10:00～12:00

集合場所：下赤塚駅北口改札口集合

見る所：赤塚4、5、8丁目、大門、四葉、徳丸6、8丁目にある樹林地。畑や農家の屋敷林が多く残っていたところ。解散は東武練馬駅の予定。時間のある人は食事しながら意見交換しましょう。

### 生き物のすめる環境整備の活動

日時：5月24日(水)、6月7日(水)、14日(水)、21日(水)、28日(水)、7月5日(水)、12日(水)、19日(水) いずれも10:00～12:00

集合場所：赤塚トンボ池

雨天の場合：中止(あやしいときは、坂本(090-4618-1295)まで)

内容：水辺生物調査、清掃、バッタ広場の点検と笹、くず等の除去